

7) 「乳管内視鏡にて乳管内乳頭腫と乳管内癌の併存が疑われた1症例」

親松 学・林 光弘
 佐藤 信昭・小山 友論
 香山 誠司・佐藤 友威
 松尾 仁光・田宮 洋一
 畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
 渡辺 和夫 (県立坂町病院外科)

症例は42歳，女性。主訴：血性乳頭分泌。現病歴：平成8年1月，乳癌検診で血性乳頭分泌を指摘され当科を紹介された。現症：左乳輪，3～4時方向の圧迫で茶褐色の分泌あり。分泌液中 CEA：1,353 ng/ml。乳管内視鏡：出血を伴う白色調の隆起性病変と赤色で浮腫状の隆起を認め乳管は閉塞し乳管内乳頭腫と癌の併存を疑った。洗浄液の細胞診は Class V で選択的乳管腺葉切除術を行った。病理診断：上皮の2相性が保たれた乳管内乳頭腫の部分と2相性を失った乳管内癌の部分が見られた。まとめ：血性乳頭分泌に対し乳管内視鏡は直接的観察と検体採取が可能で非常に有用な検査法と思われた。

8) 乳癌の組織学的予後因子の検討

本間 慶一・根本 啓一 (新潟県立がんセンター病理)
 佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)

【目的】n0 乳癌の予後因子の検討。

【対象および方法】1981年から1983年間の当院乳癌手術例のうち，重複癌，他病死を除く n0 浸潤性乳癌の99例を対象とした。光顕的観察により，組織異型度(HG)，核異型度(NG)，Mitotic index, Fat invasionを，各々3段階に Grade 分類し，リンパ管侵襲の有無を調べた。次いで各因子における健存率曲線を求め，判定区分間での有意差を検定した。

【結果】HG や NG, Mitotic index では，いずれも Grade 1 が健存率良好で，Grade 3 は早期に再発する傾向，Grade 2 は経年的に再発が増加するがあったが，有意差があったのは NG1 と NG3 との間のみであった。リンパ管侵襲と，浸潤程度により f0, f1, f2 とに

分けた Fat invasion では，ly (+) と f2 が，ly (-) や f0, f1 と比べ有意に再発が多かった。

【結語】異型度分類では，判断の容易な NG が優れている。リンパ管侵襲と Fat invasion は n0 浸潤性乳癌の予後因子として重要である。

9) 粘液癌成分をもつ乳癌の特徴

石原 法子 (済生会新潟第二病院病理検査科)
 川口 正樹・相場 哲朗
 石崎 悦郎・川原聖佳子 (同 外科)
 武田 敬子 (同 放射線科)

当院の1992年4月から1996年3月までの女性初発乳癌65症例67病変中，粘液癌(MC)成分をもつ乳癌(MC乳癌)7症例7病変(約10%)を選び検討した。

MC乳癌を1A型(MCのみ)，1B型(MC+非浸潤癌)，2A型(MC+小範囲非MC浸潤癌)，2B型(MC+広範囲非MC浸潤癌)の4型に分けると，症例数はそれぞれ1, 1, 2, 3であった。

併存癌は1B型では乳管癌で，2A型と2B型の5例中4例では乳頭腺管型癌のみであり，MCと乳管癌との関係が示唆された。全症例がシアロムチン主体の粘液を示し，深達度はfであった。1A型，1B型および2A型の全例が浸潤癌部腫瘍径 t1, ly-, n0 で病期はI期で，また4例中3例は免疫染色でCEA陰性，かつKi-67陽性細胞の割合が10%未満であったが，2B型では3例中2例が腫瘍径 t2, ly+, n1b で病期はII期であり，かつ全例がCEA陽性，3例中2例はKi-67陽性細胞の割合が10%以上であり，より悪性度が高いことが推定された。

Ⅲ. 特別講演

「ホルモン療法の現況と未来」

国立病院九州がんセンター外科

野村 雍 夫 先生